日韓発掘調査交流に参加して

韓日発掘調査交流協約に基づいて、2008年２月11日から４週間、奈良文化財研究所に滞在した。滞在期間中、甘樫丘東麓遺跡と平城宮東方官衙の発掘現場に参加する機会を得た。また、飛鳥時代と奈良時代の寺院の踏査、平城宮第一次大極殿復原現場の見学をおこなうことができた。

第一次大極殿の復原は文化庁主管で推進されており、平城遷都1300年にあたる2010年完工を目指してピッチをあげていた。私が復原現場を見学した２月20日には、全体的な骨格の組立は大部分仕上がっていて、もっぱら上層屋根の瓦を葺いているところであった。

第一次大極殿の基壇部には最先端の科学が適用されていた。基壇の内部には、水平・垂直振動はもちろん、不規則振動までも耐えることができる耐震基礎が設置されていた。このような特殊基礎によって建物の安定性が確保され、復原された大極殿は今後1000年以上耐久するとの説明を受けたが、その自負心を充分に理解することができた。

復原現場付近の製図室では、部材の組み上げた状態を実物大で作図した設計図を随時検証しており、実際に、組立工事をする前に必ず図上復原をおこなうと聞いた。少しの誤差も認めないという匠の心意気をうかがうことができた。

第一次大極殿復原現場を見学しながら、私が日本に到着した日に焼失したソウルの崇礼門（南大門）を思い出した。あっけなく焼失してしまったが、第一次大極殿復原事例などを模範として、充分な時間をかけて復原を推進すれば、崇礼門の原形を完璧に再現できると期待している。

（国立慶州文化財研究所　兪 洪植）
（日本語訳：都城発掘調査部　中川 あや）

平城宮第一次大極殿復原現場にて（右が兪 洪植先生）